

No.3	提 案 名：アクティブ・パッセージ・プロジェクト ～泉町における動線空間の再構築～	
	提案団体名：宇都宮大学 遠藤研究室	
	所 属：宇都宮大学	
	代 表 者：鈴木亮汰	指導教員：遠藤康一
メンバー	鈴木亮汰 草野聡一郎 東田雄崇 宮本朋樹 山口颯太 滝沢那智	

○ 提案の要旨

泉町は、スナックや飲食店などが並ぶ泉町通り（以下、表通り）と、住宅が並ぶ通り（以下、裏通り）があり、同じ町でありながら、昼と夜によって異なる場所のように感じられる。互いの通りからは数多くの路地や建物を貫通する線状の空間が入り込んでいるが、それらの多くは袋路的な行き止まり空間であり、そのことが2つの通りの断絶を増長していると考えられる。

本提案では、そのような線状の空間を『動線空間』と呼び、その形態や周囲の空間配列に着目することで、再編成を行い、通りと通りのネットワークを構築すると共に、この動線空間のまとまりが泉町を特徴づける新たな空間として機能する。これにより表と裏がつながると同時に、そこに面する人々の営みや新たな活動が根付いていくことで、活動と空間が結びつき、地域全体の活性化が可能となり、多くの人がいつまでも暮らしやすい中心市街地を形成する。

1. 提案の背景・目的

路地、緑道、参道など建物の隙間から生まれた、誰のものでもない曖昧な道空間は日本独自のオープンスペースとなり、近所づきあいなどのコミュニティの小さな核となる共有の場所となっていた。しかし、現在このような空間は土地所有の明確化などによって、共用空間としての使われ方はみられなくなった。

泉町においても、通りに並んだ住宅や店舗を結ぶ動線空間は数多くみられるが、そこは店舗への利用や居住者のアプローチのみに利用が限定され、共用空間としての活動は生まれていない。そのため、同じ街区であるが、それぞれが独立したコミュニティとなっている。私たちはそのような課題に対して、動線空間に着目し、再編することで、新たなオープンスペースの創出を行い、店舗や住宅に対して新たな活動や関係を作る。これは、所有が明確化された未活用なオープンスペースである動線空間を誰のものでもないみんなが参画できる場所とするものであり、新たな都市の利活用の方法の提案となる。

2. 提案の目標・課題「私たちでつくる「アスノミヤ」～スーパースマートシティ

の実現に向けて～」との関連

店舗や住宅が立ち並ぶ泉町の動線空間は、街区内部に張り巡らされた血管のように街を繋ぎ、街に対して奥行きを作っている。しかし、ここは大方、行き止まりや入ることのできない町のデットスペースのような不活性な空間であることが多い。そこで、泉町の空間構造の「地」をなす動線空間を再編することで、地域の空間構造を継承しながらも、新たな空間や動線を作り出し、活動や賑わいを生む空間の仕組みを提案する。また、動線空間の接続によって、空間の接続や循環による回遊性の向上や不活性な土地の利活用による中心市街地としての価値や魅力の向上が可能となる。これは、地域経済の新たな循環可能性に働きかけるものであり、「スーパースマートシティ」実現に大いに寄与するものと考えられる。

3. 現状分析

3.1 資料領域

栃木県宇都宮市泉町および本町の泉町通りおよび泉町通りの北側に隣接するステラ通りおよび住宅や正行寺などがある通りに面する街路および建物内通路を資料範囲とした。

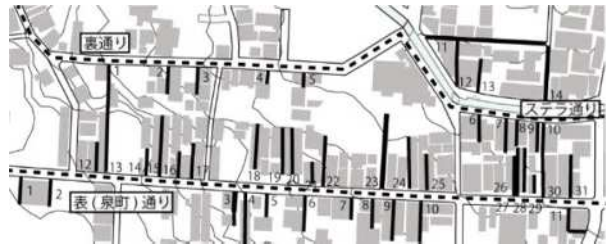


図1 資料範囲 S=1:8000

3.2 研究の概要

まず、資料範囲内の現地調査にて53の「動線空間」を抽出した(図1)。次に、動線空間の周囲に隣接する空間をとらえ、動線空間の周囲の空間の配列を明らかにする。さらに、動線空間の幅や屋根の有無、配置されている設いを分析することで、動線空間の性格を明らかにする。そして、動線空間の周囲の空間配列と空間的性格を重ね合わせることで、泉町全体の動線空間が形成する空間の特徴(タイプ)を検討する。

また、動線空間内の建物へのアプローチ等の動線性格も併せて検討し、資料範囲内に付置することで、泉町全体の動線空間が形成しているネットワークを把握するとともに、その特徴や傾向を位置づける(表1)。以上の分析を踏まえ、特徴的なエリアを選定しケーススタディを行う。

3.3 調査期間

2023年8月から10月の期間に実地調査等による記録・確認を行った。

4. 動線空間の配列的性格

動線空間が周囲の建物や街路などの中でどのように位置づいているかをみるために、動線空間に隣接する空間の構成を検討する。資料範囲内でみられた動線空間の片側それぞれに隣接する空間を「全面空地」、「一部空地」、「全面建物」、「全面壁」に分類することで、5つに整理することができた(表3)。また、動線空間の奥が「空地」、「建物」、「壁」への分類も併せて検討した(表2)。この5つのパタンのうち、「あ」は両側に空地が配され、最も外部空間との関係が強いものであるといえる。両側の空地のうち、片側の空地が駐車場として利用されているものも多く見られた。一方、「お」は片側に壁や建物が配されるもので、その内部空間との関係が強く、また、動線空間の奥が建物および壁である傾向から建物や壁に囲まれた閉鎖的な動線空間といえる。

表1 分析例

No.	オモテ12	ビル・店舗名	space5 内部通路
4章 配列的性格			
片側	建物	配列パターン	え
片側	建物	変化	なし
奥	壁	広さ	狭い
		設え	看板
5章 空間的性格			
片側	建物	屋根	あり
片側	建物	変化	なし
奥	壁	広さ	狭い
		設え	看板
6章 構成類型			
配列パターン	F	空間パターン	え
			II
7章 動線性格			
片側	複数	動線パターン	ウ
奥	なし		

表2 奥の空間配列

空地	建物	壁
空	建	壁
(20)	(16)	(17)

表3 動線空間の配列のパターン

		片側			
		空地あり		空地なし	
		全面空地	一部空地	全面建物	全面壁
片側	全面空地	オ2壁 オ5壁 オ6建 ウ3壁 ウ4壁	オ1建 ウ9壁 ウ13壁	ウ1壁	
	一部空地	オ13-b壁 オ22壁 オ23建 ウ5建	オ3建 オ8壁 オ11建 オ18-a壁 オ24建 ウ10空	ウ11空 オ7壁 オ9壁 オ13-a壁 オ14建 オ17建 オ19壁	ウ1空 ウ2空
	全面建物	あ(9)			
片側	全面壁	え(12)			
	全面空地	お(13)			
		オ10-a建 オ10-b壁 オ12壁 オ15-a建 オ15-b建 オ18-b建 オ20建 オ21壁 オ28-a空 ウ7空 ウ12空 ウ14空 オ4-a建 オ4-b建 オ16壁 オ26-a壁 オ26-b壁 オ27壁 オ28-b壁 オ28-c壁 オ29空 オ30空 オ31空 ウ6壁 ウ8壁 オ25空			
		(1)			

5. 動線空間の性格

本章では、動線空間の形態とそこでの使われ方による性格を明らかにする。まず、屋根や幅を検討することで形態の特徴を明らかにし、続いて動線空間にみられた設いの分類をすることから使われ方を抽出する。

5.1 屋根の有無による分類

まず、動線空間が内部的空間か外部的空間の違いを分析するため、動線空間上に屋根が配されるかの有無を分類した(表 4)。分類したところ、「屋根あり」が 27 件、「屋根なし」が 26 件と、同等に分布することが確認された。

5.2 動線空間の幅による分類

続いて、動線空間の幅を分析することで、動線空間の形態を明らかにする。まず幅の変化について検討し、「変化あり」と「変化なし」に分類し、さらに、幅の広さを「広い」と「狭い」に分類した(表 5)。

5.3 設いの分類による動線空間の使われ方

さらに、動線空間内に配置されている設いを分析し、動線空間の使われ方を見出した。みられた設いは自動販売機、看板、自転車、植栽、ケース、室外機であった(表 6)。設いのなかで看板が最も多くみられ、泉町の動線空間の多くは店舗の設いにより特徴づけられていることがこの分析からもわかる。

5.4 屋根と幅の重ね合わせによる空間的特徴

前項までに整理した屋根と幅の分類を組み合わせ、さらに設いによる分類を重ねることで、動線空間の空間的特徴を検討し、Ⅰ～Ⅴの 5 つのパターンを得ることができた(表 7)。まず、Ⅰは幅が広く、変化することで、動線空間内に広い場所と狭い場所をもつ凹凸の空間ができる。そしてそこに屋根が配されていることで、凹凸の空間が通りからの玄関と廊下のようになり、奥方へ向かって内部的な性格が強くなるありかたである。また、看板や自動販売機が設置されている傾向から、この場所は店舗空間と関連づいているといえる。一方、Ⅰと同様に幅が広くかつ変化ありだが、屋根が配されないⅢは植物が配置されている傾向から、凹凸の空間を利用して屋外的な活動が行われているといえる。また、Ⅴは幅が狭くかつ変化なしで、屋根が配されないもので、細い路地のような空間的特徴をもつものである。裏通りにある動線空間が多くみられたことから、裏通りには路地のような動線空間が多くあることがわかる。

表 4 屋根の有無

あり	なし
	
(27)	(26)

表 3 注) 一部屋根がかかっている事例は「なし」とする。

表 6 設いによる活動要素

自動販売機	看板
販  (2/31)	看  (29/31)
自転車	植栽
自  (11/30)	植  (19/30)
室外機	ケース
室  (17/33)	ケ  (16/33)

表 5 動線空間の幅

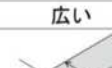
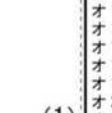
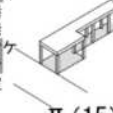
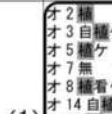
変化あり (19)		変化なし (34)	
広い	狭い	広い	狭い
			
(17)	(2)	(10)	(24)

表 4 注 1) 動線空間の幅の中央値が 1800mm であったため、1800mm 以上を「広い」、1800mm 未満を「狭い」とする。

注 2) 幅の最大値から最小値を引いた値が 1000mm 以上であった事例を「変化あり」とする。

表 7 動線空間の性格のパターン

幅	変化あり (19)		変化なし (34)	
	広い (17)	狭い (2)	広い (10)	狭い (24)
屋根あり	オ 11 販 オ 15-a 看 オ 15-b 看 オ 18-a 看 ウ 18-b 看 オ 24 植 オ 27 看  I (10)	オ 28-a 看 オ 29 無 ウ 10 室販  (1)	オ 9 植  (1)	オ 4-b 看 オ 10-b 看 オ 12 看 オ 13-a 自 オ 13-b 自 オ 19 自 オ 20 自 オ 21 自  II (15)
屋根なし	オ 4-a 看 オ 6 室 オ 16 看 オ 17 看 オ 30 看 ウ 2 室 ウ 5 自  III (7)	ウ 4 植  (1)	オ 2 植 オ 3 自 オ 5 看 オ 7 無 オ 8 看 オ 14 自 オ 22 植  IV (9)	オ 1 自 オ 31 自 ウ 1 無 ウ 3 植 ウ 11 看 ウ 12 室  V (9)

6. 動線空間の類型

前章までに整理した動線空間の配列パターンと空間パターンを組み合わせ、周辺環境に対して動線空間がどのように位置づいているかを整理した(表7)。まず、「A. 外部たまり場型」は外部空間において、両側に空地が配置されかつ動線空間は広く変化がないもので、動線空間と空地が一体的な外部のたまり場となるものである。また、植物が配置されている傾向から外部空間を庭のように使っていることがわかる。一方、「H. 路地型」は細い路地のような動線空間の両側に壁または建物が隣接するものである。また、奥が空地である傾向から(3/3)、通り抜けると開けた空間となるトンネルのような性格をもつ。また、「D. 建物前庭型」は片側が外部空間である空地、片側が内部空間である建物が配置され、さらに動線空間は屋根がなく、変化のない狭い幅となっているものである。これは片側の建物の前方に、駐車場や庭などの外部空間が配置されており、動線空間が空地と建物をつなぐアプローチとなっている。また、裏通りの動線空間が多くある傾向から(4/5)、動線空間は私的な領域である空地と住宅をつなぎ、一体的な私的領域を形成している。以上の類型は、泉町における動線空間とその周囲が形成する一体的な空間を把握することを可能にし、これら類型をもとに再編を行うことで、新たな空間を提案する。

表8 動線空間の配列と性格の構成類型

空間的性格	配列的性格	屋根あり		屋根なし		
		変化あり、広い	変化なし、狭い	変化あり、広い	変化なし、広い	変化なし、狭い
両側空地	あ	凡例 オ13-b 空、自看ケ室 動線空間 No. 1 奥の空間 1 設え		オ6建、室 ウ5建、自植室	オ2空、植 オ5壁、植ケ オ22空、植 オ23建、植 A 外部たまり場型 (4)	ウ3空、植
	い	オ11建、壁 オ18-a 壁、植 オ24建、植 ウ10空、植室壁 B 凹凸ロジ型 (5)	オ13-a 空、自看ケ室	オ3建、自植ケ オ8壁、植看ケ室	オ1建、自看 ウ9壁、看室 ウ11空、看ケ室 ウ13壁、室	
片側空地	う	オ19空、自ケゴ	オ13-a 空、自看ケ室	オ17建、植 ウ2空、植室	オ7壁、無 オ14建、自植室 C 建物前庭拡張型 (4)	ウ1空、無 D 建物前庭型 (5)
	え	オ15-a 建、壁 オ15-b 建、壁 オ18-b 建、壁 オ18-b 建、壁 E 複数内庭たまり場型 (5)	オ10-b 壁、看ケ オ12壁、看 オ20建、看 オ21壁、自看 オ28-a 空、看ケ F 内部通路型 (12)	ウ14空、自植看ケゴ	ウ7空、看室	ウ12空、看室 ウ14空、自植看ケゴ
空地なし	お	オ27壁、壁 オ29空、無 G 複数内庭たまり場型 (3)	オ4-b 壁、看ケ オ26-a 壁、看 オ26-b 壁、看 オ28-b 壁、看 オ28-c 壁、室 H 路地型 (3)	オ4-a 建、植看ケ オ16壁、植看ケ オ30空、植看 G 複数内庭たまり場型 (3)		オ31空、自植ケ室

7. 動線空間のネットワーク

前章までは、配列や空間的特徴から動線空間の類型を見出したが、本章では動線性格を見出すことで、泉町の動線空間がもたらす通りや建物に対してのネットワークの実態を明らかにする。

7.1 アプローチによる分類

まず、動線空間の奥のアプローチが「あり」、「なし」に分類した(表8)。また、動線空間の片側それぞれのアプローチを「複数」、「単数」、「なし」に分類し、両側と奥のアプローチを重ねることで、ア～キの7つの動線パターンを抽出した(表9)。アは左右に複数かつ奥にアプローチがあるもので、最も複数の動線ネットワークを形成するものである。一方、キは片側にのみ単数のアプローチがあるもので、占有されたアプローチ空間となっているものである。オは片側にのみ複数のみアプローチがあるもので、12件と最も多くみられた。

表9 奥のアプローチ 表10 アプローチのパターン

		片側アプローチ					
		複数		単数		なし	
		奥あり	奥なし	奥あり	奥なし	奥あり	奥なし
あり	複数	ア (4)	ウ (8)				
	単数	(1)	エ (5)	(2)	(0)		
	なし	イ (5)	オ (12)	カ (4)	キ (8)	(0)	(3)
なし							

7.2 動線空間ネットワークと敷地選定

前項までの分析で得られた構成類型と動線パターンと資料範囲に付置することで、血管のように街をつないでいる泉町の動線空間のネットワークを図示した（図2）。

これらの動線空間ネットワークによって、通りと動線空間や動線空間同士の動線関係を見出すことができる。それらの関係から、ケーススタディを行う特徴的な3つの敷地を選定し、敷地の課題やポテンシャルを見出した。



図2 泉町の動線空間ネットワーク

一つ目の敷地は、表通り、裏通りともに複数の動線空間がみられたが高低差によって表通り（泉町通り）と裏通り（住宅通り）のつながりが断絶されている。また、動線パターンをみると、「ウ、エ、オ」が多く（6/11）、これは動線空間の左右にはアプローチがあるが、奥にはアプローチがないことを示しており、表通りと裏通りが接続されていないエリアであるといえる。

二つ目の敷地は、正行寺への参道となっている動線空間や店舗や住宅へのアプローチとなる動線空間があり、文化や歴史の混在がみられる場所である。また、表通り（泉町通り）から大通りへ向かう動線パターンは「エ、オ、キ」が多く（4/5）、大通りと表通りが分断されているといえる。

三つ目の敷地は、資料範囲のなかで、表通り、裏通りともに最も動線空間が密集しているエリアである。動線パターンは、「オ、キ」が多く（10/14）、動線空間が接する片側の建物や空地のみにアプローチが形成されているものであり、一つの建物もしくは空地へのアプローチとしてのみ機能しているといえる。そのため、複数の動線空間があるにもかかわらず、1つ1つの動線空間は少数のネットワークしか形成しておらず、動線空間同士はつながっていないエリアである。

8.1 敷地1「イズミ・コモン・ヴィレッジ」

まず、空室となっているマンションの一部を住民同士が集まるコモンスペースとして改修し、コモンキッチン、コワーキングスペース、カフェ等の暮らしの拡張の場を挿入する。雑居ビルの上階にみられた空室はシェアオフィスを挿入するなど、商いの場として活用する。さらに、周囲の空地を公園やコミュニティファームとして活用する。それにより、近隣住民や商いを行う人々が集い、菜園を行いながら関係性を育む場となる。また、高低差によって分断されている敷地や建物の間に外階段やブリッジを設けることによって動線空間を接続する。そして、建物1階の動線空間を減築し、ピロティとすることによって、今まで閉ざされていた動線空間に光を取り込みつつ、回遊性を向上させる。表通りと裏通りを繋ぐ一体的なオープンスペースとなり、人々が新たな動線空間を行き交いながら、住民や商いを行う人同士が安心して暮らせる空間とした。

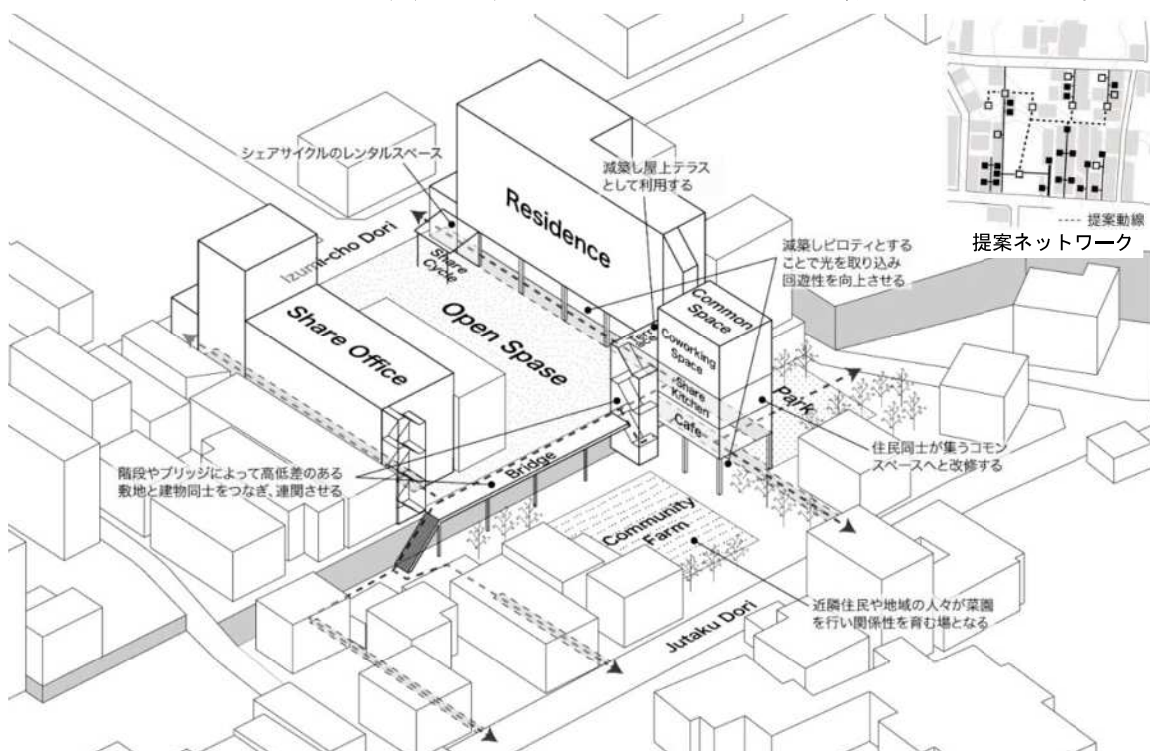


図3 「イズミ・コモン・ヴィレッジ」アイソメ

動線空間の再編により、大通り、表通り、釜川に面する裏通りをつなぎ、連続的な大きなネットワークを形成する。それにより、大通りからの人の流れを誘引し、各通り間に滞留を生む場を提案する。

現在、駐車場となっている大通りと表通りを挟む場に既存のバス停や将来の LRT 発着所の待合いの機能を果たす公園、公園沿いにはカフェを設けることで昼は木漏れ日からなる自然を感じられる落ち着いた空間になる。また、夜はライトアップがされ、ジャズが聞こえてくるような宇都宮らしさが出る大人の雰囲気の空間となり、昼夜で表情が変わる場をつくる。空き店舗になっている表通りの場には壁をガラス張りとし、チャレンジショップを設け、中の様子が見えると共に

明るい動線空間を創る。また、動線空間の塀を除去し、舞台テラスを設けることで境内を繋ぎ、裏通り、釜川へと空間を連関させる。チャレンジショップと舞台テラスはお寺とも連携し、様々なイベントが開催できる。既存の通り、植栽、モノを活かし一体的な空間となると共に、かつて地域との結びつきが強かった寺のオープンスペースと街をつなぐプロムナードとなる。

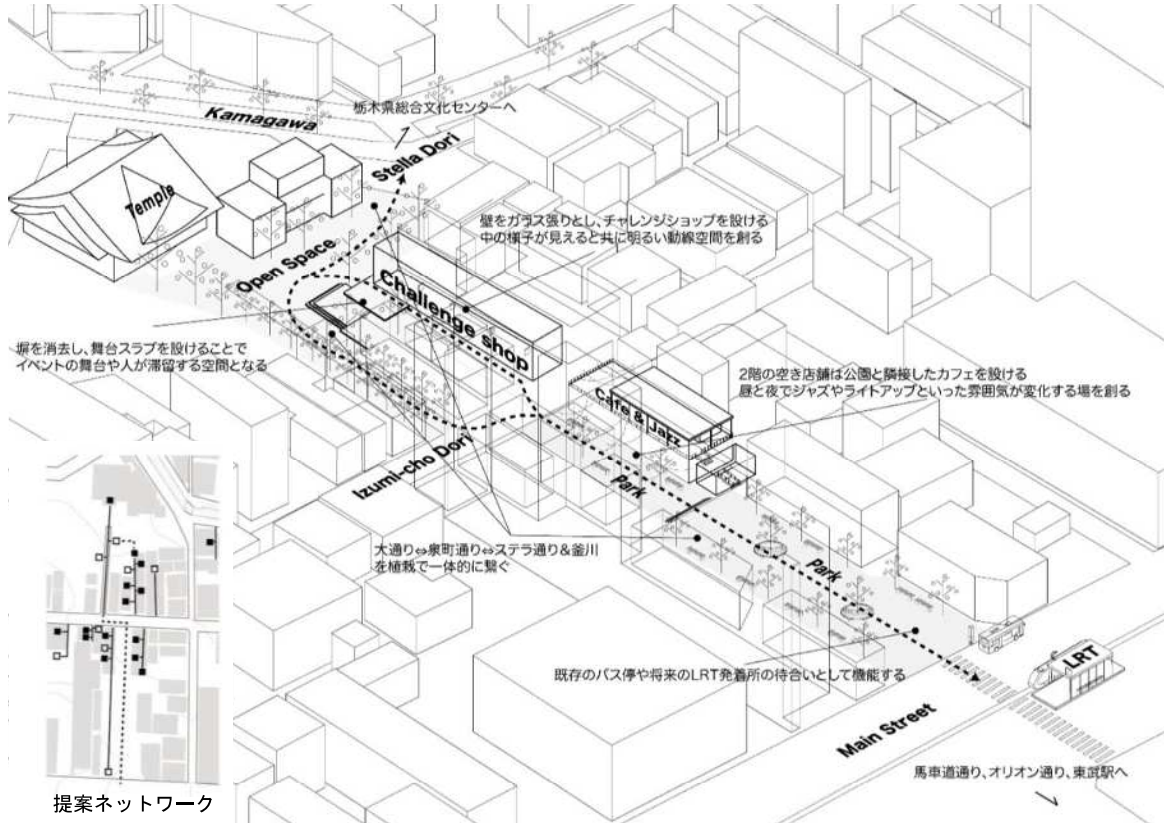


図4 「マチテラ・プロムナード」アイソメ

8.3 敷地3「ステラ・ポケット・パーク」

このエリアの動線空間は全て表通り、裏通りともにスナックや居酒屋などの夜の飲食店のアプローチ空間となっている。一つの建物もしくは空地へのアプローチとしてのみ機能しており、動線空間同士はつながっていないが、奥へ行くと未接道の空地が現れ、これらの動線空間が面している。これは、複数の動線空間を、空地を中心につなぐことで、回遊性を向上するとともに新たな活動を導く可能性をもつ。そこで、ここでは昼夜の活動を受け止め、隣接する店舗空間の拡張となる場を提案する。

まず、建物に囲まれた空地をポケットパークとする。それに面する表通りの動線空間は、E「複数内部たまり場型」や、F「内部通路型」がみられた。これにより、動線空間の塀を除去することで、隣接する動線空間同士が視覚的につながり、開放的な空間となる。また、裏通りの動線空間は、壁をセットバックして生まれるロジヤが、スナックの店舗空間を間借りすることを可能とする、昼の活動を生み出す空間となる。これら、塀の除去や、壁のセットバックなどの操作は、動線空間を通りに対して顕在化させ人々を奥へと誘い込む。また、隣接する動線空間を結ぶように、減築やテラスを設けることで、立体的なネットワークを生み、パークに面した回遊性を持たせた。また、現存する蔵をショップにし、パークにカフェを設け、新たに横の動線を生み出した。これらの動線空間はパークを中心とするようなネットワークを作り、昼夜での活動が集まり広がるだけでなく、店舗同士で新たな関係性を生み出し、都市の奥の囲まれた小空間に、隣接する空間と親密な関係を生む居場所を創出する。

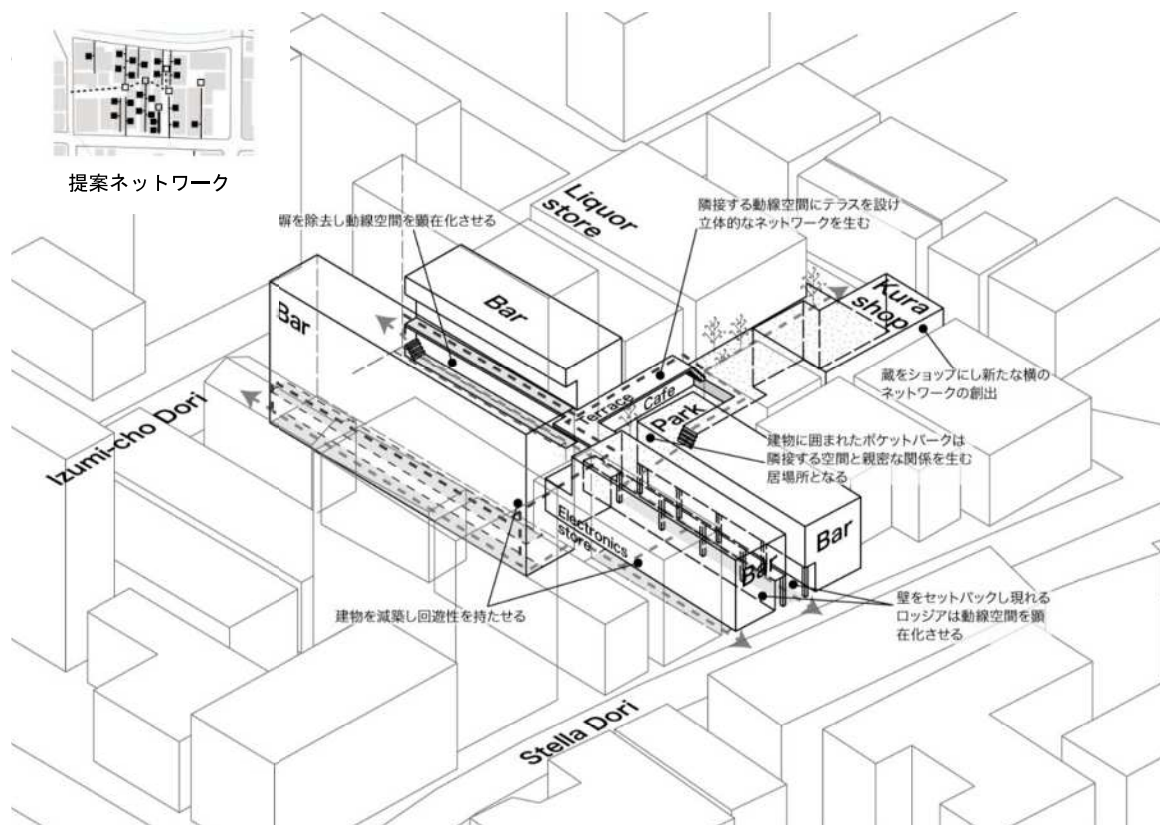


図5 「ステラ・ポケット・パーク」アイソメ

9. まとめ・提言

以上、泉町の動線空間の分析から、周囲の暮らしとつながり、拡張する「イズミ・コモン・ヴィレッジ」、通り同士をつなぎ、新たなプロムナードとする「マチテラ・プロムナード」、密集した店舗同士をつなぎ新たな店舗空間や公共空間を生み出す「ステラ・ポケット・パーク」の3つを提案した。この3つの提案は全て所有が明確化され、未活用なオープンスペースである動線空間を互いに提供し、生まれる空間である。そうすることで泉町の特性を生かしながら、不活性な場所に新たな活動を生むことで、地域経済の循環を促す。これはスーパースマートシティの実現に大きく寄与するものである。

今回の研究では、所有関係による動線空間の分断が明らかになったと同時に、そこに街の活性化の可能性を見出すことができた。本提案で示したケーススタディはその可能性の一例を示すものであり、不活性なオープンスペースを互いに提供しあう仕組みの構築などソフト面での取り組みや制度的な検討によりこれらの試みを具体化することができると考える。

【参考文献】

- 1) 宇都宮市：第3期宇都宮市中心市街地活性化基本計画：中心市街地に関する統計的なデータの把握・分析,26p,令和2年3月
- 2) 国土地理院：基盤地図情報データ, <https://fgd.gsi.go.jp/download/mapGis.php>, 2023年6月(2023年7月)